

# Stanford University Research: Atacama Humanoid Still A Mystery

Steven M. Greer MD

22 April 2013

## スタンフォード大学による調査： アタカマ・ヒューマノイドの今なお解けない謎

スティーブン・M・グリア 医師

2013年4月22日

( [SiriusDisclosureのウェブサイトより](#) )

スタンフォード大学の一流科学者による6ヶ月の調査を経ても、あのアタカマ・ヒューマノイドは依然深い謎のままです。



アタカマ・ヒューマノイドは、2003年にチリの人里離れたアタカマ砂漠地帯で最初に発見されました。しかし私は、2009年にスペインのバルセロナにあるミイラに似たヒューマノイドの遺体を調査するよう依頼されるまで、この検体の存在を知りませんでした。2012年の夏、宇宙生物調査研究所長のラモン・ナビア-オソリオ・ビジャールは、私たちのチームがこのヒューマノイドを追加検査することを快く許可してくれました。

私たちは2012年の9月末、この遺体の詳細なX線画像、CATスキャン、およびスタンフォード大学で検査する遺伝学的サンプルを入手するため、スペインのバルセロナに赴きました。

スタンフォード大学医科大学院、細菌学・免疫学科、ラッチフォード・アンド・カーロタ・A・ハリス教授であるギャリー・ノーランが、この人間に似た検体の検査チームを率いました。ノーラン教授は、DNAサンプルを採取する手順を示すと共に、やはりスタンフォード大学のラルフ・ラックマン博士と協議の上、骨格異常を適切に評価するためにはどのようなX線画像とCTスキャン(\*CATスキャンと同意)が必要なのかを示しました。

ラックマン博士は、スタンフォード大学の客員学者であり、客員教授です。博士はまた、'症候群、代謝異常、骨格異形成の放射線学 (*Radiology of Syndromes, Metabolic*

*Disorders and Skeletal Dysplasias*) ' の著者であり、骨格異形成および骨格異常の世界的権威の一人です。ラックマン博士は、このヒューマノイドの X 線画像、CAT スキャン、および写真を調べました。

私たちは、ヒューマノイドの右側前部肋骨 2 本の末端部から、外科的解剖により良好な DNA 物質を採取しました。サンプル採取手順に取り入れられた解剖顕微鏡画像でも見られたように、これらのサンプルには明らかに骨髄物質が含まれていました。頭蓋骨からも、外科的無菌状態の中で外科的手法により、骨髄および他の物質が採取され、ノーラン博士が用意した無菌容器にそのまま移されました。

法医学的な記録手順にしたがい、この証拠は 2012 年 10 月に私からワシントン D.C. のノーラン博士に手渡されました。

ノーラン博士は、'太古の' または古い DNA を検査するために必要な、きわめて詳細な手順の準備に取りかかりました。この仕事は高度に専門化したものであるため、この分野を専門とする世界屈指の科学者たちが、この取り組みのためにノーラン博士と協議しました。

アタカマ・ヒューマノイドは、13 センチメートルまたは 6 インチの身長を持ち、きわめて乾燥しているものの、完璧に原型を保っています。その CAT スキャンは、明らかに胸部の内部器官を示しています（肺および心臓の構造と思われる組織）。（CAT スキャンは[こちら](#)にあります）この検体が実際の生命体であり、どのような悪ふざけの類でもないことは、まったく疑う余地がありません。そのことは、スタンフォード大学のノーラン博士およびラックマン博士により確認されています。

この検体には 10 本しか肋骨がなく、今まで人間の中で発見されたことはありません。また、きわめて異常な頭蓋を持っています。特徴的なことは、その頭蓋冠が、比例的に、正常な人間に見られるそれよりもはるかに大きいということです。骨はよく発達しており、胎児のそれではありません（下図を見てください）。この検体の全身には、複数の骨格異常が見られます。重要なことですが、胎児のものではない、十分に成長した歯が下顎（顎の骨）に見られます。右側上腕骨に骨折が見られますが、頭蓋骨右側後部から側面にかけても陥凹骨折が見られ、これが死因となったことはほぼ間違いありません。

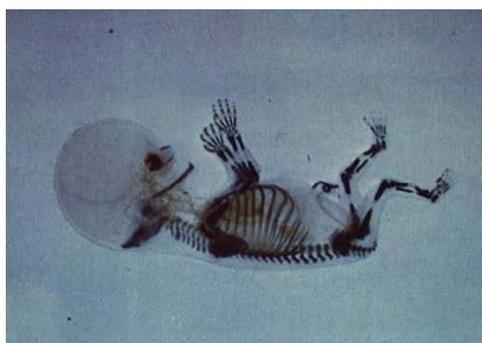


図 1： 人間の胎児, 2 ヶ月

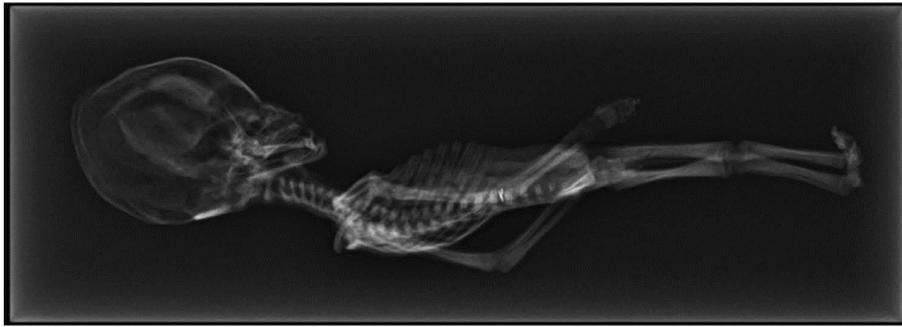


図 2： アタカマ・ヒューマノイド

重要なことですが、ラックマン博士はこのヒューマノイドが奇形、遺伝的欠陥、骨格異形成のいずれでもなく、知られている他のどのような人間の異常でもないと結論しています。しかし、これまでに得られた最も驚くべき結論は、ラックマン博士がこのヒューマノイドは6ないし8年間生存したと結論していることです。(ラックマン博士の報告書全文は[ここ](#)にあります) この結論は、膝の骨端板を検査し、様々な年齢にある正常な人間のそれと比較することにより得られました。



図 3： 人間の膝, 1 ヶ月



図 4： 人間の膝, 6 歳

ラックマン博士は、このような症状および一連の調査結果を有する人間の小人症は知られていないと述べました。身長6インチにとどまったまま6ないし8年間生存する人間は知られていません。

さらに注目すべきは、バルセロナにあるマンチョン放射線学センターのマンチョン博士もそのX線画像を検査し、ほぼ間違いなくこの検体が胎児ではなく、1年以上、おそらくは数年間生存したと結論していることです。

以前にどこかで、このヒューマノイドが人間の胎児であったとの間違った報道がなされたことがありました。

これが明らかに事実と異なることは、ラックマン博士の調査およびマンチョン博士の検

査から結論することができます。人間の胎児の X 線画像と比較すると、人間の胎児における骨格の発育とアタカマ・ヒューマノイドの X 線画像の違いが顕著であることがわかります。



図 5：人間の胎児



図 6：人間の新生児図



7：アタカマ・ヒューマノイド

入念かつ熟練した DNA 抽出が、スタンフォード大学のノーラン博士によりなされました。きわめて質の高い十分な量の DNA が抽出され、解析されました。

これまで予備的な DNA 解析が実施されたのみであり、ノーラン博士によれば、すべての手分析を終え確証が得られるまでに、1 年またはそれ以上を要するかもしれないということです。

ノーラン博士の記述です：“この DNA は高い品質を有し、重大な DNA 劣化は皆無か、あったとしても僅かである”

これもノーラン博士の記述です：“配列分析により、この検体が‘新世界’の霊長類であることは明確に排除される”

重要なことですが、ノーラン博士は次のことを発見しています：“予備的な結果によれば、既知の原発性小人症または他の種類の小人症に共通する、統計的に関連のある遺伝子タンパク質の変異は見られない。このことから、検体に見られる症候を説明する遺伝的根拠がもしあるとしても、このレベルの分解能および現段階での解析からは、その原因となる変異は明らかでない”

留意すべきことですが、ネアンデルタール人は 99.5 パーセントが遺伝子的に人間と同一です。また、チンパンジーや類人猿は 96 ないし 97 パーセントが同一です。

現段階において、その遺伝子型は表現型（遺伝的特徴が身体的・形態的に現れる特徴を意味します）と合致するようには思われません。

この謎に答えるためには、DNA のさらに詳細な解析、および専門家による評価プロセスを通じた調査結果の確認が必要となるでしょう。

ノーラン博士の報告書（[ここ](#)で予備的コメントの全文を読みたい - 注意： DNA 試験は継続中であり、完了していません）は、さらに詳細な調査が必要であると結んでいます：

“この予備的報告書では、起源不明の遺伝性疾患を持つ、考古学および人類学的関連性を有する人間の検体の分析に、現在入手し得る生物医学的技術がいかに容易に適用され得るかが示される。この報告書は、この人間の検体に見られる変異の性質、またはその原因となる疾患についての、公式の結論ではない。現在...（註： 以下、ノーラン博士の報告書の一部が掲載されているが、専門的でもあり省略する）”

臨床学的には、もしこのヒューマノイドが数十年から数世紀前に生きていた（正確な年代は不明ながら、最近生存していた検体ではありません）としても、世界のそのような辺鄙な未開地で、6 インチの赤ん坊または子供がどのようにして6ないし8歳になるまで生存し得たのか、それを理解することは困難です。今日の最高の新生児集中治療室（NICU）でさえ、このような検体を生存させることはほとんど不可能でしょう。一人の救急医として、私は未熟児や無能症の著しい奇形児を分娩させたことがあります。ですから私は、このヒューマノイドがとても小さく、華奢であることに驚きました。医学的に言いますと、‘もし’これが人間の奇形にすぎないのだとすると、6ないし8歳まで生きるのはとても考えられないことです。臨床医学者として言いますと、これは私が話した他の医師たちも同意見でしたが、6時間生存することさえ疑問です。さらに注目すべきことですが、この検体の下顎には、視認できる、よく発育した歯が残っていました。このことも、この大きさの人間の胎児とは合致しません。



この検体はるか以前に生きたこと、この地域がとても原始的な未開地 - 現代の医学技術および設備を完全に欠いた - であったことを考えると、どのようにしてこの子供は生きていたのでしょうか？ また誰と一緒に？ 確かに、現時点では答よりもさらに多くの疑問があります。

ラモン・ナビア-オソリオ・ビジャーレおよびその同行者たちの報告書により、この謎はさらに複雑になります。彼らはこのヒューマノイドが発見された地域に赴き、先住民から情報を得ました。先住民たちは UFO を目撃し、このヒューマノイドの全体的な描写に一致する、とても小さな生命体を目撃していました。損傷していない他の複数のヒューマノイドが、いくつかの辺鄙な集落や場所に保存されているかもしれないという報告もあります。しかし、それは確認されていません。

この事件を、さらに徹底して調査することが必要です。DNA 解析は、まだその初期段階にあります。私たちはアタカマ砂漠に科学調査隊を出し、このヒューマノイドの検体が他にないかを調べる必要があります - そして報告にあったように、その地域で進行中の UFO/ET 活動があるのかも。



## 仮説および考察

もし遺伝的特徴が、このヒューマノイドに対する人間のつながりを示し続けるのであれば、それは何を意味するのでしょうか？ 私たちは、アタカマ・ヒューマノイドが ET であるとは言えません。それがかつて生きていた、既知の - すなわち臨床学的に考え得る - 人間であるということもできません。そうすると、彼は一体何者でしょうか？ このヒューマノイドは謎のままです。そして、もしかすると - 本当にもしかすると - 私たちは何者かということについて、多くの発見がなされる入り口かもしれません。

最近、DNA およびコンピューター解析に取り組んでいる一部の科学者たち（ここを讀ま

りたい) は、DNA は約百億年以上存在し続けていることを発見しました - しかし、地球の存在期間はその半分にも足りません。おそらく生命は宇宙に実に普遍的に存在しており、コンタクトにより、世界から世界へと広まってゆくのかもかもしれません...

私は、人間のゲノム (註: 全遺伝子情報) の後成 (註: 生物の個体発生について、予め完成したものがただ大きくなる (前成説) のとは異なり、単純な構造に次々と新しい構造が付加されることで複雑な構造が発生していくという考えをいう) による増大の可能性を他の科学者たちと議論したことがあります。アタカマ・ヒューマノイドは、いわゆるハイブリッド (交配種) なのでしょうか? 私たちは皆、ある種のハイブリッドなのでしょうか? それが数百万年間にわたり他の地球外生命体文明とのコンタクトにより起きてきたことなのでしょうか? 身元を明かすことを拒むある関係筋は、数年前に私にこう述べました: 彼は国家安全保障局 (NSA) の文書を見たことがありますが、そこには人間のゲノムに過去 64 回の後成があり、その結果現生人類になったという結論が書かれていました。このようなことが起こり得たのでしょうか?

ジェット推進研究所 (JPL) のある科学者が、かつて私にこう言いました: 火星の上またはその近傍に発見される物体 - 私たちが火星にふたたび目を向け、それを調べるように宇宙飛行士バズ・オルドリンが望んだオベリスクのような - は、古代における ET と人間の間につながりを示すものでしょう。これがその情報が機密にされている理由です。なぜですか? と私が訊くと、彼はこう言いました: “地球上のあらゆる原理主義者の正統的信念体系の基盤がひっくり返るからです”

科学を追求することは、物事の真実を追求することです。今いる地点から前進するために必要なものは、偏見のない開かれた心であり、それにより私たちはともに、今はまだ隠されている多くの物事について真実を発見することができるのです。

(訳: 廣瀬 保雄)